

ホール経営者のつぶやき
「二代目な僕ら」

第1回

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

終身雇用が謳えますか？

パチンコ業界で30代、40代の経営者といえ、圧倒的に僕のような「二代目」が多いのではないのでしょうか？

僕たち二代目経営者を「先代に比べカリスマ性が弱い」と評する人もいます。そして、その重圧に押し潰されそうな気分になることも、時にはある。でも、むしろ偉大な人物を親に持った幸運に、感謝すべきでしょう。

こんなことわざを聞いたことがありますか？

『売り家と 唐様で書く 三代目』。

ここで言う「唐様」とは、江戸時代上流階級で流行した、中国の書風をまねた書体のことです。

要するに、先代は財を築くためにガムシヤラに働き、文字を習う暇もなかった。二代目や三代目は、親の財力で唐様文字を習うなど教養も付いたが、坊ちゃん育ちで仕事もせず遊び回り、事業は破綻。最後は住居も手離す羽目になり、「売り家」という看板文字を、唯一身に付いた唐様

のしやれた書体で書くという皮肉です。先代の築いたものを、二代目、三代目が放漫経営で無残に食い潰すということを目指しています。

ホール業界を不況と捉える向きもあります。もちろんこの業界だけでなく、大企業のTOBなど、従来の価値観を揺るがす出来事が相次ぐ昨今。だからこそ、僕たち二代目が「何を為すべきか」を考えると来ているのだと思います。

先日、店長会議の席上で訓示しました。「わが社は終身雇用であることを忘れずに、スタッフ一人一人の能力を見出し、活かしてほしい。社内に無駄な人間など一人もいないのだから」と述べたところ、ある社員から「心がとても温かくなりました」と言われました。

『こんな当たり前のことで？』と驚きましたが、彼が以前勤務していたベンチャー企業では、不適合な人材と判断すると段ボールに荷物を詰込み、ポンとお払い箱にするというのです。そんな環境の中、彼自身も「社風にそぐわない者は解雇が当然」という感覚だったので、ことさら終身雇用の響きが新鮮だったそうです。

言われてみれば確かに、当たり前ともいえる「終身雇用」は、様々な角度から見ると困難な側面もある

ようです。

終身雇用制度を運用するのに必要なのは、人材の育成とゴーイングコンサーン。ゴーイングコンサーンとは、企業は継続し続けなければならないという意味です。企業経営とは、それだけの社会的責任があると思っています。

「子供が産まれました」と、社員が満面の笑みを浮かべたて可愛い赤ん坊を連れてくるのは大変嬉しいものですが、同時に責任という巨岩がズシッ！とのし掛かるのを感じます。

僕たちが養うのは社員だけではない、彼・彼女らの後ろには、いくつもの命と生活が、鎖のように繋がっている。経営者の重責を痛感します。

声を大にして「終身雇用」を謳うこと。これは世間に向けた「優良企業のアピール」ではなく、本当は経営者である自分への、戒めの言葉かもしれません。先代から継いだ知識は「売り家」と書くためではないのですから。



さおとめ・よしひげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在8店舗を運営。1965年生まれ。

▲J